

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム やまぼうし桜台

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390100261		
法人名	一般社団法人米内地域支援プラザ		
事業所名	グループホーム やまぼうし桜台		
所在地	〒020-0002 盛岡市桜台2丁目18-3		
自己評価作成日	令和3年10月10日	評価結果市町村受理日	令和4年1月18日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

①整理・整頓・清掃 ②利用者に寄り添った介護 ③協力病院と連携した24時間の医療体制 ④畑作業を取り入れた季節を感じられる生活
--

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou">https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou</a>
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

閑静な住宅団地の中心部にあり、中学校や老人福祉センター、児童センターとも隣接地域の福祉拠点の一つになっている。コロナ禍の影響で、地域との交流活動は一時的に休止しているが、施設の広報誌を町内に回覧したり、近くのコンビニのイートインスペースに広報誌を置かせてもらっているなど、事業所からの情報発信は継続している。医療連携においては協力医療機関からの月2回の訪問診療と週1回の訪問看護師の派遣を受けることにより、健康管理が保たれ、利用者と家族の安心感につながっている。「整理・整頓・清潔」という運営理念は職員の日々のケアに生かされ、施設の内外は清潔に保たれ、利用者とも常に丁寧な思いやりのある態度や言葉づかいで接している。災害時には近隣住民の避難先として受け入れることも可能としており、住民へのPRも行っている。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和3年10月29日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印		
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム やまぼうし桜台

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「整理・整頓・清掃」を基本とし清潔感のある施設を心掛けている。毎日の朝礼や週に一度の幹部会・ケア会議等で常に確認している。	法人の社是でもある「整理・整頓・清掃」をホームの理念とし、職員は常に清潔感が行き届いた施設環境の確保を心掛けている。朝礼のほか、毎週開催する法人の幹部会や事業所のケア会議においても、この理念について確認し、日々の業務に生かされている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	今年度もコロナ禍で地域のイベントなどが中止となり、他者との交流は極端に減っている。	コロナ禍により、以前のように活発な地域との交流ができないているが、広報誌の「やまぼうし通信」を毎月町内会を通じて回覧したり近くのコンビニのイトインスペースに広報誌を置かせてもらっているなど、地域への情報発信に努めている。最近、近所の小学生が外から声をかけてくるようになった。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	上記同様にコロナ禍により、活動を自粛していた。本来であれば、ボランティアなどを受け入れ、交流を図るところだが、自粛せざるを得ない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍の影響で、事業所での開催は行っていない。	コロナ禍の影響受け、今年度の対面会議の開催は5月のみで、その後開催できていない。自治会長、地元商店街代表、家族代表らが委員として参加しており、感染予防対策などの意見が出されている。11月には開催の予定である。	コロナ禍で通常の形での開催が難しくなっているが、コロナ禍に伴う書面会議を含め、運営基準に定めるところにより「おおむね2月に1回以上」の開催と/なるよう期待する。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	今年度は介護保険証の更新や盛岡市からのコロナ関係のPCR検査や各種調査報告等で協力をを行っている。	地域包括支援センターの職員が運営推進会議の委員として出席しているほか、市役所介護保険課には、利用者の入退居に関して出向くなどして相談している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束防止委員会を設置し、定期的に身体拘束について意見交換を行っている。	身体拘束防止委員会は、職員4人が委員となり、3か月に1回開催している。新人を含めて職員研修は年2回開催している。丁寧な言葉遣いは職員間で共有されており、スピーチロックのような話し方はほとんど見られない。ベッドでの人感センサーは、家族からの了解を得て2人が使用している。	

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム やまぼうし桜台

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待について話題として提供し、具体的な事例を通して、勉強会を行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、権利擁護の制度を使っている方はいない。職員へは制度の概要は伝えるようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時にご家族に時間を取ってもらい、丁寧に説明し、納得が得られてからサインをいただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営についての家族からの意見や要望はない。面会についての問い合わせはあるが、コロナ禍での面会はリスクが高く、お断りせざるを得ない。リモート面会を行うためにノートパソコンを購入したが、実際に行えた家族は1組しかいなかった。さらに本人がなかなか理解できず、集中力が続かなかった。ケアプラン作成時に来所したときに利用者に対する思いや要望等の聞き取りは行っている。	利用者から意見を聴き出すことは難しくなっているが、会話の中から拾い出すようにしている。コロナ禍で家族の面会制限があり、リモート面会できるようにパソコンを整えたが、活用は少数に留まっている。家族へは、本人の生活の様子を毎月お便りとして送付している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	週に一度のケア会議などのミーティングを通して、職員が意見を言える環境を提供している。	毎週のケア会議等の際に、職員から活発に意見、提案などが出されている。例えば、トイレのドアが折り畳み式であったが、車イス対策として引き戸に変えている。毎年1回、職員との個人面談を実施している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は職場環境の向上に努めている。		

事業所名 : グループホーム やまぼうし桜台

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は働きやすい環境整備に努めているが、住宅地ということもあり、なかなか職員が増えない。結果として、職員に対して研修を行う機会が少なくなってしまう。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍で積極的な施設交流は控えている。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居初期は不安な気持ちが大きいため、本人の言葉を傾聴し、どの部分に不安を感じているかを分析し、安心できるような声掛けを行うようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	認知症に対する家族の不安を取り除くため、ケアマネジャーが家族との面談を行っている。支援方針を伝えながら家族の気持ちを傾聴し、家族と施設の関係づくりを行っている。入居後もその様子を電話で伝えたり、会報やブログ等で家族の様子をお知らせし、関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	家族から本人についての聞き取りと本人の面談を行い、本人の課題について支援の検討を行い、家族に専門医の受診等の助言等を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者の高齢化や認知症の進行に伴い、できることが限定されてきている。洗濯物のたたみ方などは出来るが調理や掃除など複雑な判断を求められることは継続できない。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍で様々な制約があるなか、リモート面会など工夫し、家族との絆が途絶えないように努力している。今年度実際に行えたのは家族はまだない。対応できる家族も少ないが、リモート面会を理解できない利用者もいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	要望があれば友人や親せきなど面会交流も考えているがコロナ禍で行えていない。唯一、訪問診療、訪問看護の医師や看護師、福祉美容師などは継続してもらっている。	コロナ禍のため、面会、来訪、外出が制限されている中で、訪問診療で来所する医師や訪問看護師との温かいふれあいが、新たな馴染みとなっている。また、必要に応じて来訪する訪問美容師も、世間話の相手となってきている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	座席を話が弾む利用者同士を近くにするなど人間関係を考慮し、良好な関係が得られるようにしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	問い合わせがあった場合は情報提供や相談にのっている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者との会話の中で思いや希望の把握に努めている。困難な場合は今の気持ちを推し量り、尊重している。	半数以上の利用者は思いや意向を言葉で伝えることができ、職員は日常の会話の中から、今の思いを聴き、感じ取ることに注力している。その思いは記録に書き込み、職員間で共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者からだけでなく家族からも聞き取りを行うようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者一人一人の性格や心身状態に合わせて、レクリエーションを考えたり座席を工夫している。利用者も90歳を超えた人たちが9人中4人となり、利用者の高齢化が進んでいる。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	週に一度以上ケアマネジャーと介護員とで検討会を持ち、意見交換を行い情報を共有している。	ケアマネは、本人の生活歴やこれからの意向を本人、家族から聴き取り、介護プランの原案を作成している。毎週行うケア会議で原案についての検討を経て、決定している。プランの見直しは6か月毎に行っているが、状態の変化によりその都度変更している。モニタリングには担当職員だけでなく、全職員が関わっている。	

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム やまぼうし桜台

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	利用者一人一人の様子を個別の記録用紙に記載し、職員間で共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ禍で他者との交流を目的とした施設イベントが開催できないでいる。代わりにリモート面会等を実施している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	利用者のアセスメントを基に地域資源を把握し、本人の思いや希望に活かせるよう環境を整えていく。しかし、コロナ禍で交流は控えなければならない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医療機関による月2回の訪問診療、週1回の訪問看護を受けている。ほとんどの診療科に対応しているが、無理な時は紹介状により、整形外科などの受診を行っている。	利用者全員が協力医療機関の中津川病院をかかりつけ医とし、同病院による月2回の訪問診療を受診している。また、同病院の訪問看護サービスから週1回看護師の来訪がある。整形外科などの受診の際には家族が同行している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	記録用紙を介護と看護で統一しているため、記入漏れなく、伝達できている。訪問看護は24時間体制で必要に応じて連絡を行い、アドバイスをいただいている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	病院の医療連携室の相談員と情報共有しながら、早期退院できるように努めている。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム やまぼうし桜台

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に施設の医療体制について説明し、同意をえている。また、利用者が重度化した場合には、主治医から病状説明をしてもらい、必要な医療を受けられるようにしていく。	重度化した場合の方針や看取りの取り組みを入居時に家族に説明し、了解を得ている。状態が変化してきた場合には、訪問診療の医師の指導を受け、医療的ケアのできる施設を紹介している。過去に4人の看取り経験があるが、職員への負担が大きく、現在は取り組んでいない。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	応急処置に係る研修動画を見ながら、勉強会を行いいざという時に備えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的な訓練と災害に対するマニュアルを作成している。そのマニュアルについても読み合わせを行い、災害に対する意識を高めている。	ハザードマップでは浸水、土砂崩れ等の指定区域にはなっていない。火災を想定した避難訓練を年2回行っているが、事業所では、2階から車椅子使用者3名を避難させることが課題と認識している。災害時の住民の避難受入れが可能であり、食糧の備蓄もあるので、その旨を近隣にPRしている。	特に夜間の避難において、少ない人員で2階から行うことになるため、夜間想定訓練により具体的課題を見出して対策を検討するよう期待したい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	認知症の進行に伴う、様々な認知機能の低下があるが、人格を尊重し、丁寧な対応を心掛けている。	職員には、利用者はお客様であるという意識を持つよう常に話しており、職員は、本人の話を否定しないで、1対1となって良く聴くことを心掛けている。排泄で失敗した場合でも、本人の羞恥心に配慮しながら周りから見えないよう、優しく声をかけながら支援を行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表現したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の今の気持ちを大事にし、無理のないように個別に日課の変更も行いながら、利用者に寄り添って支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入浴日の変更や食事時間の調整など、施設の生活にうまく乗れない時は、可能な限り利用者のペースに合わせている。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム やまぼうし桜台

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の好みもあるが、施設にある衣類を工夫しながら、身だしなみの支援を行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一人一人の食事形態に注意しながら、食品を崩しすぎないように提供している。高齢化が進み、準備や後片づけが困難になってきている。	主菜は隣接するサービス付高齢者住宅の厨房で調理し、職員はご飯とみそ汁を作って利用者提供している。事業所ではおやつ作りを職員と一緒にになっている。少し離れた場所にある畑に、職員と車で出かけて野菜を収穫したり、持ち帰って枝豆もぎを手伝うなどもしている。園庭での流しソーメンで今年も楽しく過ごすことが出来たとしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者一人一人、食べる量や嗜好を把握し、水分に関してはゼリーやトロミ材を活用し、水分が不足しないよう心掛けている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後の口腔ケアだけでなく、定期的に訪問歯科による診療を受け、様々なアドバイスを受けている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	記録用紙に毎日の排泄の記録を行い、その状態を観察している。排便の状況に応じて、下剤の種類や量を調節し、可能な限りトイレでの排泄を促している。	紙オムツの使用者1人、布パンツ使用で自立の方が1人、その他はリハビリパンツを使用している。大半の利用者がトイレで排泄しており、排泄チェック表を活用し、現状の機能維持に向けて適時の声掛けと誘導を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	認知症の進行に伴い身体機能の低下も見られ、結果的に自力での排泄は困難になってきている。下剤の種類を変更しながら、排便を促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に合わせた支援をしている	週2回入浴日を設けている。体調に応じて、入浴日の変更も行いながら対応している。身体機能の低下に伴い、バスボードを購入し、またぐ動作の補助し、安全に入浴を行っている。	入浴は週2回を基本としているが、体調や気分によっては別の日にするなど、柔軟に対応している。入浴を嫌がる傾向の方、同性介助希望の方もおり、それぞれに応じて対応している。バスボードを使って浴槽に安全に入れるように工夫している。入浴は職員と1対1となり、親しく会話する中で利用者の思いを知る場ともなっている。	

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム やまぼうし桜台

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者の高齢化、認知機能の変化に応じて、一人一人の体調に合わせて起床時間や休息の時間を柔軟に対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬の管理は全面的に施設側で行い、訪問の薬剤師の指導を受けている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	季節毎に施設内の装飾を変更し、季節を感じてもらえるようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で外出の頻度はほとんどない。主治医以外の病院受診時はコロナワクチンの接種状況を確認し、家族対応で行う場合がある。また、天気が良い時は近場の花壇に歩いて見に行ったり、玄関前のテラスで日光浴を行ったりしている。	コロナ禍により、外出の機会は大きく減少している。それでも、ホーム周辺での散歩や畑での収穫などの外出機会を作って、戸外の空気に触れることが出来るよう支援している。コロナ禍も少し収まる傾向が見られるようになってきことから、紅葉見物のミニドライブなどの「外出」の再開を検討している段階である。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理は基本家族に行ってもらっている。トラブル等を避けるため、利用者はお金を持たないことにしている。コロナ禍で買い物レクも控えている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話や手紙は特に制限は設けていない。手紙などの文字を書くことは苦手になっている方が多い。電話も時間を見ながら、適時家族へつながるように支援している。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム やまぼうし桜台

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	整理・整頓・清掃を基本とし、施設内外は清潔に保たれている。施設内の共用部分は季節に合わせて飾りつけを行い、季節感が出るように工夫している。各居室にエアコンも完備し、快適な住環境を提供している。	ホール兼食堂では、エアコンやパネルヒーターで快適な温度管理がなされている。「整理・整頓・清潔」の理念に基づいて、常に清潔さが保たれており、テーブルには季節の花が飾られている。壁面には利用者と職員が共に作成した季節を感じられる切り絵などが飾り付けられている。利用者はしりとりゲームや唱歌を楽しんで過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールなどの共用スペースは基本的に開放している。それ以外で一人の空間は居室しかない。しかし、1階に喫茶スペースを設けている。家族との面会やお茶会の時などに使用し、その雰囲気を楽しんでいる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に家族に部屋作りをしてもらっている。その後は今の利用者の生活に合わせていながら配置の工夫等を行っている。	居室にはベッドや、クローゼット、エアコン、パネルヒーター、テレビが備え付けられている。利用者は衣装ケースやタンス、家族写真などを持ち込み、壁には手作り作品やカレンダーなどを飾り、利用者本位の部屋としている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	介助に関しては、すべて職員が行うのではなく、利用者の残存能力を活かせるように行っている。		